

## 中学校陸上競技部のリーダーシップに関する研究

Management of Track and Field Team in Junior High School from the Viewpoint of Leadership.

鶴山 博之  
TSURUYAMA Hiroyuki

中学校陸上競技部員を対象に、スポーツ集団としての特性とリーダーシップ、およびリーダーシップに対する満足度、結果に対する満足度との関係から、競技的スポーツ集団としての中学校陸上競技部のリーダーシップの機能について検討を行った。

因子分析結果、抽出された因子は、高校生を対象にした因子と比べても、スポーツ集団におけるリーダーシップにふさわしい妥当な因子であるといえる。

中学校陸上競技部は学校の特色、環境、部員の特質などによって異なる集団であり、リーダーは集団に対応したリーダー行動をとる必要がある。中学校陸上競技部におけるリーダーは、競技に関するトレーニング・技術指導だけではなく、いろいろな環境に対応できるなどスポーツマネジメントに関する能力が必要であると思われる。

キーワード：中学校陸上競技部、リーダーシップ、マネジメント

### I. 緒言

わが国の競技スポーツの底辺は学校運動部が支えているといっても過言ではない。学校運動部には集団の日本的特質（川辺 1980）が随所に見られ、暴力事件もいくつか発生するなど、いまだに問題が発生している。しかしながら学校運動部のマネジメントに関する問題点はいくつか指摘されているが、学校部活動は学校教育の重要な構成要素となって定着していて、学校の活性化の上で部活動は不可欠な文化である（内海、1998）ことも事実である。

中学校においては運動部活動に関わる生徒は一部のスポーツ少年団や総合型地域スポーツクラブでの経験者を除くと、中学校から初めてスポーツ活動を体験するケースが多く、競技レベルも大学・高校に比べ高いものとは言えない。また各中学校における歴史や伝統は異なるといってもそれほど大きな差があるものではなく、規模の違いはあるものの、スポーツ活動の環境、取り組み方もそれほど差はない。しかし、大学・高校と比べ部員のモラル特性は異なり（筆者、2013）、成熟度も異なると考えられる。したがってリーダーは中学校という組織の特性やメンバーの特性を重

視して、状況に応じたリーダーシップを発揮する必要がある。(丹羽 1972、野中 1980、野崎 1989)

すべての組織において、リーダー行動の善し悪しによって業績が左右されるといっても過言ではない。リーダーシップに関する研究として、三隅 (1973) は様々な集団のリーダーシップ要因としての P (Performance) と M (Maintenance) の機能に着目し、その機能を展開しスポーツ集団へも応用している。しかし、三隅のスポーツ集団に対する応用は一般大学のスポーツ集団を対象に行われており、競技志向の強い集団については P 機能を中心としたリーダーシップ機能を重視して考えるべきであろう。松原 (1990) も学校運動部におけるリーダーシップスタイルについて競技成績を第一と考えるならば P 型が最も有効なスタイルとしている。

三隅の場合は対象を広く考慮し理論を一般化させる狙いのためか、一般的な集団維持に関する項目が中心であったのに対し、Chelladurai ら (1980) の LEADERSHIP SCALE FOR SPOTS はスポーツ集団に特有なタスクの内容に関する項目が多く、より具体的に行動が示されている。さらに集団成員の満足を「リーダーシップに対する満足」「結果に対する満足」の 2 因子を抽出し、それらの満足に与えるリーダーシップ機能についても検討している。しかし Chelladurai らの方法はカナダと日本の比較研究といった性格から、翻訳上の問題やワーディングの問題から一つの文章に複数の意味を持つものが含まれている。そのため杉山 (2000) は Chelladurai らの方法における多義的なワーディングの問題を単純化・修正し、より具体的なオリジナルな項目を設定し、体育大学運動部のリーダーシップ機能を明らかにしている。

陸上競技は典型的な個人競技であり、パフォーマンスについても客観的評価がしやすい。また集団で練習を行っても、主体はあくまで個人であるという特徴がある。筆者の高校陸上競技部員を対象にした、競技意欲とリーダーシップ要因との研究 (2000) では「社会的支援」「練習の厳しさ」が競技意欲に肯定的に作用していることが明らかになっている。永井ら (1998) は公認コーチを対象にした研究において陸上競技者のリーダーシップ行動として 6 因子が認められたとしている。また筆者らは Chelladurai らの方法を用い女子体育大学陸上競技部でのリーダーシップ研究 (1997) を行ったが、学年、ブロック (短距離、中・長距離、跳躍、投擲) ごとにリーダーシップの機能が異なっていることが明らかとなっている。また高校陸上競技部でのリーダーシップ研究 (2010) では各学校の特色に合ったリーダーシップスタイルの必要性が明らかとなっている。しかし体育大学と高校と中学校では、集団の年齢、競技力、モラル、成熟度に違いがあるのは明らかである。ここでは大学と高校と中学校でのリーダーシップを比較・検討することから杉山の方法を用い、中学校陸上競技部のリーダーシップの実態を明らかにすることにより、求められる陸上競技部の集団機能やその指導のあり方について検討するものである。

## II. 研究方法

本研究の調査は富山県内の中学校陸上競技部員 197 名 (男子 102 名、女子 86 名、不明 9 名) を対象として行った。調査対象の陸上競技部はいずれも活動が活発であり、競技成績も高いほうの学校である。またそれぞれの学校の顧問 (コーチ) の陸上競技についての競技歴、競技実績、指導実績については様々である。調査の方法はアンケート用紙により行い、調査期間は 2012 年 7 月 7 日～7 月 8 日であった。本研究は杉山が Chelladurai らの Leadership Scale for Sports 40

項目を参考に作成した 29 項目を用い、リーダーシップに対する満足度についても杉山が Chelladurai らの 10 項目を参考に作成した 4 項目を用いた。それらの項目について自己評価させ、分析・考察した。各種目の測定スケールは「非常に思う」「思う」「どちらともいえない」「思わない」「全然思わない」の 5 段階評定を採用し、5 段階順にそれぞれ 5、4、3、2、1 の得点を与えた。リーダーシップの 29 項目について因子分析を行い、因子を抽出して因子スコアを算出した。因子スコアは因子に相当する項目の平均値を算出し、標準化(標準偏差が 1.0、平均が 0 になるよう)したものを用いた。また満足度については杉山が抽出した 2 因子をそのまま用いた。さらにリーダーシップの満足度に関する 2 因子をそのまま目的変数として使用し、各リーダーシップ要因を説明変数とする重回帰分析を行った。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. リーダーシップの因子構造

杉山 (2000) のスポーツ集団におけるリーダーシップに関する 29 項目について因子分析を行い、主因子法による回転前の固有値が 1.0 以上を基準として、3 因子が抽出された。因子の単純構造を得るために Normal-Varimax 法による直交回転を実施し、因子負荷量 0.500 以上の項目を取り上げて因子の解釈・命名を行った。この結果、抽出されたリーダーシップ因子は 3 因子であり、全分散の 69.6% が説明された。(表 1)

表 1. リーダーシップの因子構造(主因子、NORMAL VARIMAX)

	アイテム	因子負荷量
第 1 因子(F1):	知識・指導	
	指導に関する情報が豊富である	0.901
	その時の状況に応じて指導する	0.822
	合理的な練習法を用いる	0.822
	必要な技術や作戦をわかりやすく説明する	0.811
	1つ1つの練習内容がまとまりを持ったものである	0.787
	失敗した時、具体的な改善点や方法を指示する	0.779
	全体をうまく統率している	0.778
	運動と休養のバランスを考えた適切な練習の設定をする	0.770
	練習に一貫性がある	0.768
	部の在り方をよく考える	0.758
	全員が努力できるように配慮する	0.750
	部員のやるべきことを明確にする	0.728
	部員をよく理解しようとしている	0.728
	それぞれの部員の部内での働きを認める	0.728
	部員がよいプレーをした時に誉める	0.724
	部員の体調管理に注意を払う	0.721

	部を引っばっていく	0.711
	怪我をしたときに応急処置ができる	0.659
	雰囲気作りに気を配っている	0.652
	部員によく声をかける	0.632
	新しい練習方法を取り入れようとする	0.620
<b>第2因子&lt;F2&gt;:</b>	<b>自主性の尊重</b>	
	トレーニングメニューに部員の意見を取り入れさせる	0.804
	年間の練習・試合・行事などの計画を部員に立てさせる	0.794
	部の目標は部員に決めさせる	0.580
	部員個人に目標を設定させる	0.558
<b>第3因子&lt;F3&gt;:</b>	<b>現場指導</b>	
	練習をよく見に来る	0.855

## 2. 決定した3因子とその解釈

第1因子は「指導に関する知識が豊富である」「必要な技術や作戦をわかりやすく説明する」といった指導に関する知識と「その時の状況に応じて指導する」「合理的な練習法を用いる」といった練習全体の

指導に関する項目なので「F1:知識と指導」の因子として解釈した。第2因子は「トレーニングメニューに部員の意見を取り入れさせる」「年間の練習・試合・行事などの計画を部員に立てさせる」などの部員の主体的行動に関する項目なので「F2:自主性の尊重」の因子としてとして解釈した。第3因子は「練習をよく見に来る」という実際に現場で指導を行うことに関する項目なので「F3:現場指導」の因子としてこれを解釈した。

筆者(2010)が高等学校陸上競技部員を対象に抽出した因子は「F1:統率と個別対応」「F2:指導」「F3:主体性の促進」となっている。これに対し本研究の因子は、部全体の統率、部員個人へのきめ細かな対応よりも、競技力向上に直接かかわる「指導」を重視している傾向が認められる。このことは、筆者(2010)の調査対象がある程度競技経験のある高等学校陸上競技部員であったのに対し、本研究の調査対象はそれに比べキャリアの浅い中学校陸上競技部員であったことが影響していると考えられる。つまり競技スポーツへの取り組み方の違いが因子構造の違いに現れていると考えられる。ただ因子の大きさについての違いはあったものの、本研究で抽出された因子は、高校生を対象にした因子と比べても、スポーツ集団におけるリーダーシップにふさわしい妥当な因子であるといえる。

	F1	F2	F3
<b>固有値</b>	17.634	1.466	1.079
<b>寄与率</b>	60.807	5.054	3.721
<b>累加寄与率</b>	60.807	65.861	69.582

## 3. リーダーシップ因子、満足度因子に対する部員の反応

### 1) 男・女別にみた因子スコア

表2は男女別の因子スコアを比較したものである。その結果、すべての因子において女子が高い傾向が認められたが、どの因子においても男女間に有意な差が認められなかった。高校生では

女子は男子に比較して指導者が主体となって部全体に目を配り、個人に対する配慮・指導を期待する中において意義を見出しているのに対し、男子はどちらかという自分たちが主体となって活動を推進することに意義を見出している傾向が認められ、女子は男子と比べ指導者の強いリーダーシップに期待する部分の大きいことが認められていたが、中学生では差がなく、中学生と高校生との差によるものと考えられる。

表2. 男女別因子スコア

因子	男子	女子	T-値	P	
F1:知識・指導	-0.087	0.133	2.269	0.134	N.S.
F2:自主性の尊重	-0.107	0.107	2.136	0.146	N.S.
F3:現場指導	-0.769	0.063	0.910	0.341	N.S.
N	101	88			

## 2) 学年別にみた因子スコア

学年別に因子スコアを比較してみると(表3)、1年生が2、3年生に比べ、第1、第2因子について高い傾向が示され、逆に第3因子については2、3年生が1年生に比べ、高い傾向が示された。

このことははじめて競技スポーツに関する部活動をけんけんする1年生のコーチに対する期待の表れであると考えられる。一方、2、3年生では大きな因子である第1因子の低下が、2年生の段階

表3. リーダー行動の学年別因子スコア

因子	1年生	2年生	3年生	F-値	P	
F1:知識・指導	0.115	-0.003	-0.154	1.633	0.198	N.S.
F2:自主性の尊重	0.286	-0.035	-0.258	5.253	0.006	**
F3:現場指導	-0.130	0.057	0.079	0.884	0.415	N.S.
N	68	62	67			

\*\*P<0.01 N.S no significant

から急激に認められた。これらのことは、筆者がリーダーシップについて高校生を対象にして行った研究(2010)でもほぼ同様の傾向が認められた。このことから1年生は「競技指導に対する知識や実践的な練習内容を求める」という姿勢が強く認められる。2,3年生についてはそのような傾向があまり認められず、練習内容よりも実際に現場で指導してくれることを重視する傾向があるのではないかと考えられる。また「F2:自主性の尊重」の因子が低いことから、自分たちの意見が指導者に取り上げられていないという不満があるのではないかと考えられる。1年生は部活動を始めてから間もないため、初めて専門的な練習・指導を受けることになり、部活動という活動を含めて、新鮮に感じていることも影響しているとも考えられるが、自分の競技力を認識して自らの目標を失いかげ、向上心に陰りの出る3年生や、部内で中間的な存在であり自分たちの意見が取り上げられていないと感じることの多い2年生に対しては、モラル同様それぞれの学年に適したマネジメントの必要性があると考えられる。

陸上競技は典型的な個人競技であり、競技に対する考え方、価値観、部全体についての考え方が中学生といえどもそれぞれの部員間でかなり異なっていると考えられる。中学生は競技経験も浅く、競技に関する知識も少ない。またそれだけに個人に対する細やかな指導を心がけるとともに、部全体がまとまって目標に向かって努力する態度を育てるとともに競技力の向上を目指すといった難しいコーチングが求められる。

## 3) 専門種目別に見た因子スコア

表4. リーダー行動の種目別因子スコア

因子	短距離	中・長距離	跳躍	投てき	F-値	P	
F1:知識・指導	0.195	-0.236	-0.078	0.330	2.08	0.070	N.S.
F2:自主性の尊重	0.144	-0.260	0.265	-0.011	2.73	0.021	*
F3:現場指導	-0.145	0.097	0.139	0.407	1.09	0.370	N.S.
N	91	63	28	8			

\* P&lt;0.05 N.S no significant

専門種目別に因子スコアを比較したところ(表4)、高校では専門種目による違いは認められなかったが、中学校では「F2:自主性の尊重」において有意な差が認められた。また5%水準までの有意差はなかったものの「F1:知識・指導」においても差が認められた。「F2:自主性の尊重」においては中・長距離にくらべ短距離・跳躍が高い傾向が認められ、「F1:知識・指導」においては短距離・投てきが高い傾向が認められた。大学陸上競技部における専門種目間の比較では、トラック種目とフィールド種目の間にモラル、リーダーシップについて明確な差が認められている。(筆者ら1994、1996、1997) また高校陸上競技部と大学陸上競技部との間に明確な差が認められており(筆者2011)、練習形態の違い(大学では短距離、中長距離、跳躍、投擲などのブロックごとによる練習が行われるのに対し、中学・高校ではウォーミングアップ段階までは全員一緒に行うことが多い)によるものであると考えられる。つまり大学ではそれぞれのブロックに異なるリーダーがいてその影響を受けるのに対し、中学でも高校と同様に一人のリーダーが全般にわたって指導する場合が多く、そのためモラルについては専門種目の違いによる差が認められなかったと考えられる。(筆者2013) しかし中学校では中・長距離が他の種目に比べ「F1:知識・指導」「F2:自主性の尊重」の因子スコアが低いことは、中学校レベルでは競技経験、競技に関する知識も少ないことから、リーダーは技術指導が必要な種目、あるいは危険を伴う種目に目が行く傾向にあるためではないかと考えられる。また中・長距離種目では選手が自主的に練習を行うという状態にまで育っておらず、リーダー主導の練習が日常行われているためではないかと考えられる。

## 4) 学校別に見た因子スコア

表5は学校別の因子スコアを示したものである。学校別の因子スコアの比較ではすべての因子において有意な差が認められた。

C校、G校、J校では全ての因子において高い因子スコアが認められている。これら3校の指導者のコーチングスタイルを日頃から観察・比較すると、異なる理由が考えられる。

まず、C校では、部活動という組織で活動しながら、他校との交流や顧問以外の指導者からの指導の機会が他の2校に比べ多いと考えられる。また指導者が、選手と共に競技に取り組む場面もあることから、指導者と選手の指導する上での距離は非常に近いと考えられる。このことより、指導者が指導に関する知識が豊富であり、また、選手とともに活動することにより、より選手に近い場所で指導することで選手一人一人の特性や状況が把握しやすく部員への配慮が行いやすいことから指導者のリーダーシップに関して全体的に高い因子スコアが認められたと考えられる。

表5. リーダー行動の学校別因子スコア

因子	A校	B校	C校	D校	E校	F校	G校	H校	I 校	J校
F1:知識・指導	-1.025	0.274	0.288	0.342	0.239	0.185	0.512	-1.710	0.364	0.055
F2:自主性の尊重	0.539	-0.218	0.408	0.029	0.236	0.195	0.005	-0.808	-0.405	0.108
F3:現場指導	0.177	-0.488	0.248	-0.355	-0.452	-0.232	0.241	0.176	0.051	0.227
N	16	5	22	20	21	20	19	15	29	30

F-値	P	
12.572	0.000	***
3.018	0.002	**
1.675	0.098	**

\*\*\* P<0.001    \*\* P<0.01

次にG校では、全体的に高い因子スコアが認められたものの、3つの因子を比較すると、「F1:知識・指導」と「F3:現場指導」に比べて、「F2:自主性の尊重」の因子スコアが低い。このことから、G校では指導者はリーダーシップを発揮し選手に影響を与えているが、自主性の尊重が低いことから、リーダーの指導方法を佐藤（1995）の「厳格型」と考えることができる。部の規律に厳しく、選手の怠慢を許さないといった指導方法により自主性の尊重の部分が他校より低い因子スコアが認められたものと考えられる。

J校は、調査を行った中学の中では比較的学力が優れている傾向にある。そのため、高いレベルでの学習と部活動の両立が選手にとって求められると考えられる。選手はそれぞれに合った練習計画や練習の時間配分が必要であり、指導者にとっても配慮が必要となる部分である。また、選手が自主的に練習の効率を考えたり、工夫して練習したりする場面も多いと予想できる。そのため、特に「F2:自主性の尊重」と「F3:現場指導」で高い因子で高いスコアが示されたと考えられる。

このように中学校においても高校と同様に学校を取り巻く環境やリーダーの知識、性格、指導方法などに大きく影響されることが明らかとなった。

##### 5) コーチから受ける影響

表6は学年別にコーチからどのくらい影響を受けているかを示したものである。5%水準で学年による違いが認められた。学年が進行するにしたがってコーチの影響を強く受けることが認められた。全体でもコーチから影響を「強く受ける」選手は40%を超え、「まあ受ける」選手を含めると70%を超えることから、高校陸上競技部の場合(筆者2011)よりやや低いものの、コーチの影響をかなり強く受けていることが認められた。(筆者2013)

表6. 指導者から受ける影響度の比較

因子	1年生	2年生	3年生
強く受ける	23(34.3%)	29(46.8%)	34(51.5%)
まあ受ける	23(34.3%)	21(33.9%)	12(18.2%)
受ける	16(23.9%)	7(11.3%)	11(16.7%)
あまり受けない	4(3.0%)	0(0.0%)	1(1.5%)
全く受けない	1(1.5%)	5(8.1%)	8(2.1%)
N	67	62	66

$\chi^2=19.43$  DF=8 P<0.05

表7. 指導者から受ける影響別因子スコア

因子	強く受ける	やや受ける	どちらとも	あまり受けない	全く受けない	F-値	P	
F1:知識・指導	0.438	-0.354	-0.390	-0.612	-1.990	34.03	0.000	***
F2:自主性の尊重	0.008	0.013	0.218	0.681	-0.926	4.77	0.001	***
F3:現場指導	0.095	-0.059	-0.047	-0.176	-0.091	0.32	0.864	N.S.
N	16	6	28	58	84			

\*\*\* P<0.001 N.S no significant

表7はコーチから受ける影響度別に因子スコアを示したものである。第1、2因子において0.1%水準で有意な差が認められた。コーチの影響を強く受ける選手ほど、競技に直接かかわる「F1:知識・指導」において高い傾向が認められた。高校における選手とコーチの関係と、中学校におけるそれとでは、部活動の学校教育における位置付けはそれほど変わらないと思えるが、高校のほうが生徒の競技歴も長く、専門性も高いと考えられる。しかし中学校においても高校と同様にコーチの影響を強く受ける選手ほど、モラル同様競技に直接かかわる因子において高いことが認められた。各校のコーチには指導実績の違い、また指導のスタイルの違いがあると考えられ、どの学校のコーチがどのようなスタイルであるかについての客観的指標はない。しかしコーチから強い影響を受けているほど、リーダーシップが機能していることは高校同様明らかである。これらのことから競技力の向上には、リーダーシップが機能していることの必要性が明らかとなった。

#### 6) 満足度に関する男女別因子スコアの比較

満足度に関する男女別の因子スコアの比較では「リーダーシップに関する満足度」「結果に対する満足度」とも男女間に有意な差は認められなかったが、どちらかという「リーダーシップに関する満足度」については男子より女子のほうが高い傾向が認められた。「結果に対する満足度」については女子より男子のほうが高い傾向にあった。(筆者2013)

表8は「リーダーシップに関する満足度」を目的変数とし、リーダーシップ要因の3因子を説明変数とする重回帰分析を男女別に比較したものである。分散分析の結果、全体、男子、女子そ



れぞれについて 0.1%水準で回帰は有意であった。標準偏回帰係数から見るとすべての因子がプラスに影響していることが認められた。男女とも「F1:知識・指導」の因子が大きく貢献していることが認められた。「F2:自主性の尊重」については「F1:知識・指導」の因子ほどではないものの男女ともプラスに貢献しているのに対し「F3:現場指導」については女子がでは貢献していないことが認められた。これらのことから、選手の「リーダーシップに関する満足度」を高めるためには競技に関する知識・指導力を高める必要があると認められた。

表8. リーダーシップに関する満足度の男女別比較

因子名	全体 N=197		男子 N=102		女子 N=86	
	標準偏回帰係数	t値	標準偏回帰係数	t値	標準偏回帰係数	t値
F1:知識・指導	0.668	14.44***	0.619	9.39***	0.816	12.31***
F2:自主性の尊重	0.289	6.26***	0.284	4.31***	0.364	5.53***
F3:現場指導	0.237	5.13***	0.305	4.67***	0.067	1.04
重相関係数	0.766		0.766		0.812	
分散比	91.33 ***		45.81 ***		54.18 ***	

\*\*\* P<0.001

#### 7) 満足度に関する学年別因子スコアの比較

満足度に関する学年別の因子スコアの比較では「リーダーシップに関する満足度」について有意な差が認められなかったが、「結果に対する満足度」については有意な差が認められた。しかしながら全体として

「リーダーシップに対する満足度」「結果に対する満足度」とも1年生が2, 3年生に比べ高く、リーダーシップ因子につい

表9. 満足度学年別因子スコアの比較

因子	1年生	2年生	3年生	F-値	P	有意差
F1:リーダーシップに対する満足度	0.184	-0.038	-0.145	1.910	0.151	N.S.
F2:結果に対する満足度	0.325	-0.215	-0.126	5.826	0.003	**
N	68	62	67			

\*\* P<0.01 N.S. no significant

ての反応と同様な傾向が認められた。中学校入学後に競技スポーツを本格的に始める生徒が多く、初めて専門的な指導を受けることになる。この点にから入部間もない1年生の「リーダーシップについての満足度」が高いと思われる。さらに 0.1%水準では有意な差が認められた「結果に対する満足度」では1年生に比べ2, 3年生が低く、自分が期待していたような結果が残せていない部員が多いためではないかと考えられると考えられる。

学年別の比較では全学年において、特に3年生において「F1:知識・指導」が大きく貢献していることが認められた。競技スポーツ集団である以上、競技に関する知識や指導力を持つことは成員を満足させるためのリーダーとして重要な資質であるといえる。「F2:自主性の尊重」では2, 3年生で有意な貢献を示しているのに対し、1年生ではほとんど貢献していないのが認められた。また「F3:現場指導」でも全学年で貢献していることが認められ、中学生段階では実際に練

習場面に立って指導することがリーダーシップに対する満足度につながるということが認められた。

表 10. リーダーシップに対する満足度の学年別比較

因子名	1年 N=68		2年 N=62		3年 N=66	
	標準偏回帰係数	t値	標準偏回帰係数	t値	標準偏回帰係数	t値
F1:知識・指導	0.520	4.87***	0.501	5.15***	0.754	11.33***
F2:自主性の尊重	0.141	1.28	0.426	4.36***	0.269	4.02***
F3:現場指導	0.246	2.31*	0.362	3.56***	0.224	3.37***
重相関係数	0.565		0.714		0.853	
分散比	10.01	***	20.06	***	56.28	***

\*\*\* P<0.001 \* P<0.05

#### 8) 満足度とリーダーシップ因子の規定関係

表 11 は「結果に関する満足度」を目的変数とし、リーダーシップ要因の 3 因子を説明変数とする重回帰分析を男女別に比較したものである。分散分析の結果、全体、男子、女子についてのすべて 0.1%水準で回帰は有意であった。このことは「結果に関する満足度」についてもリーダーシップ要因が影響していることを示している。しかし標準偏回帰係数については全体、男子、女子とも「リーダーシップに関する満足度」を目的変数とした場合に比べすべての因子において貢献度はかなり低いことが認められた。「リーダーシップに関する満足度」において特に高かった「F1:知識・指導」の貢献度が大きく低下し、「F2:自主性の尊重」「F3:現場指導」についての貢献度が低くなっている。また「結果に関する満足度」に大きく影響するであろうと予測された「F1:知識・指導」については「リーダーシップに対する満足度」に比べ、貢献度が全体的に低いことが認められた。これらのことから「結果に関する満足度」については、リーダー主導による熱心な指導によって競技成績を向上させるより、選手の主体性を尊重した指導のほうに満足感を感じていることが推察されよう。

表 11.結果に対する満足度の男女比較

因子名	全体 N=197		男子 N=102		女子 N=86	
	標準偏回帰係数	t値	標準偏回帰係数	t値	標準偏回帰係数	t値
F1:知識・指導	0.260	3.96***	0.269	2.92**	0.315	3.09**
F2:自主性の尊重	0.290	4.42***	0.260	2.82**	0.390	3.84***
F3:現場指導	0.136	2.17*	0.185	2.02*	0.039	0.40
重相関係数	0.412		0.434		0.438	
分散比	13.17	***	7.51	***	6.65	***

\*\*\* P<0.001 \*\* P<0.01 \* P<0.05

#### IV.まとめ

本研究は中学校陸上競技部員を対象に先行研究である杉山の方法を用い、陸上競技部のスポー

ツ集団としての特性とリーダーシップ、およびリーダーシップに対する満足度、結果に対する満足度との関係から、競技的スポーツ集団としての中学校陸上競技部のリーダーシップの機能について検討を行った。結果は以下のように要約される。

1. 筆者(2010)が高等学校陸上競技部員を対象に抽出した因子に比べ、本研究の因子は部全体の統率、部員個人へのきめ細かな対応よりも、競技力向上に直接かかわる「指導」を重視している傾向が認められる。このことは、ある程度競技経験のある高等学校陸上競技部員に比べキャリアの浅い中学校陸上競技部員であったことが影響していると考えられ、競技スポーツへの取り組み方の違いが因子構造の違いに現れていると考えられる。因子の大きさについての違いはあったものの、本研究で抽出された因子は、高校生を対象にした因子と比べても、スポーツ集団におけるリーダーシップにふさわしい妥当な因子であるといえる。
2. 因子スコアにおける男女差はすべての因子で認められず、女子が男子と比べ指導者の強いリーダーシップに期待する部分が大きかった高校の場合との違いが認められた。また学年間の比較では学年が進むにつれて「F2:自主性の尊重」の因子が低くなることから、2,3年生において自分たちの意見が指導者に取り上げられていないという不満があるのではないかと考えられる。1年生は部活動を始めてから間もないため、初めて専門的な練習・指導を受けることになり、部活動という活動を含めて、新鮮に感じていることも影響しているとも考えられるが、自分の競技力を認識して自らの目標を失いかげ、向上心に陰りの出る3年生や、部内で中間的な存在であり競技力においても3年生よりも劣る場合が多い2年生に対しては、モラル同様それぞれの学年に適したマネジメントの必要性があると考えられる。つまり上級生の主体的活動を尊重しつつ、それぞれの部員に対する細かな配慮とトレーニング指導を行うといった難しいリーダーシップ行動が求められる。
3. 学校別の因子スコアの比較ではすべての因子に明確な差が認められたことから、それぞれの指導者は個別的なリーダーシップを発揮しているといえる。このように中学校においても高校と同様に学校を取り巻く環境やリーダーの知識、性格、指導方法などに大きく影響されることが明らかとなった。競技成績に直接関わるであろう「F1:知識・指導」の因子スコアが高かった学校は、他校に比べ若干競技成績に優れているように思われる。しかしこれだけではリーダーシップスタイルと競技力との関係を論ずることはできない。各学校の特色にあったリーダーシップスタイルが必要である。
4. リーダーシップに関する満足度とリーダーシップ因子との関係については、男女とも「F1:知識・指導」が高い貢献度で説明された。そのほか男子は「F3:現場指導」、女子は「F2:自主性の尊重」が高い貢献度で説明された。学年の比較では全学年にわたり、特に3年生において「F1:知識・指導」が、さらに2,3年生では「F2:自主性の尊重」が大きく貢献していることが認められ、高校の場合と同様学年によるリーダーシップに対する満足度のあり方が異なることが認められた。  
また結果に対する満足度とリーダーシップ因子との関係については、リーダー主導による熱心な指導によって競技成績を向上させることと同じくらい、選手の主体性を尊重した指導に満足感を感じていることが推察された。

これらの結果から、中学校陸上競技部におけるリーダー行動の内容を具体化することができた。本研究の結果から、現状の中学校陸上競技部の指導に関する提言的なポイントを指摘することができる。

中学校陸上競技部は学校の特色、環境、部員の特質などによって異なる集団であり、高等学校陸上競技部の場合と同様、リーダーはそれぞれの集団に対応したリーダー行動をとる必要がある。特に中学校陸上競技部は、高校以上に競技志向の強い部員とそうでない部員が混在している集団であることが多い。どの部員にとっても競技活動を行って良かったと感じさせることが学校教育における運動部活動の重要な点であると考えられ、競技力向上だけではなく活動そのものに対しても喜びを感じさせる指導が求められている。つまり中学校陸上競技部におけるリーダーは、競技に関するトレーニング・技術指導だけではなく、いろいろな環境に対応できるなどスポーツマネジメントに関する能力が必要であると思われる。

#### 引用・参考文献

Chelladurai,P., Saleh.S.D.(1980) Dimension of leader behavior in sports. Development of leadership scale. *Journal of Sport Psychology*, 2:34-45

川辺光 (1980) 学校運動部集団の日本人的特質. 体育とスポーツ集団の社会学, 同和書院 : 61-82

松原敏浩 (1990) 部活動における教師のリーダーシップスタイルの効果. 教育心理学研究, 38 : 312-319

三隅二不二 (1973) リーダーシップ行動の科学. 有斐閣

永井純・佐々木秀幸・高井和夫・西野美紀子・大庭恵一 (1998) 陸上競技指導者のリーダーシップに関する研究. 陸上競技紀要, 11 : 10-22

丹羽劭昭 (1972) 運動部におけるモラル. 体育集団の研究, タイムス : 376

野中郁次郎 (1980) 経営管理. 日本経済新聞社

野崎武司・植村典昭 (1989) リーダーシップの構造づくり行動がスポーツチームに及ぼす効果. 体育・スポーツ経営学研究, 6 : 1-9

佐藤正伸・長堂益丈 (1995) 競技者の競技意欲に対する指導者の影響. 陸上競技研究, 22 : 34-43

杉山歌奈子 (2000) 競技スポーツ集団におけるリーダーシップ研究. 日本女子体育大学修士論文

鶴山博之 (2000) 競技意欲と満足度から見た陸上競技部のリーダーシップに関する研究. 北陸体育学会紀要, 36 : 25-35

鶴山博之 (2010) 高校陸上競技部のリーダーシップに関する研究. 富山国際大学子ども育成学部紀要, 1 : 53-62

鶴山博之 (2011) 高校陸上競技部のモラルに関する研究. 富山国際大学子ども育成学部紀要, 2 : 87-95

鶴山博之 (2013) 中学校陸上競技部のモラルに関する研究. 富山国際大学子ども育成学部紀要, 4 : 73-83

鶴山博之・畑攻・渡部誠・武田一 (1997) 競技的スポーツ集団としての陸上競技部の指導に関する研究. 陸上競技紀要, 10 : 25-33

鶴山博之・畑攻・加藤昭・渡部誠・武田一（1994）モラルから見た陸上競技部のマネジメントに関する基礎的研究. 陸上競技紀要, 7 : 29-35

鶴山博之・畑攻・加藤昭・渡部誠・武田一（1996）リーダーシップから見た陸上競技部のマネジメントに関する基礎的研究. 陸上競技紀要, 9 : 21-30

鶴山博之・畑攻・加藤昭・渡部誠・武田一（1997）競技的スポーツ集団としての陸上競技部の指導に関する基礎的研究. 陸上競技紀要, 10 : 25-33

鶴山博之・畑攻・杉山歌奈子（2001）競技的スポーツ集団におけるリーダーシップの固有性・個別性に関する研究. 体育・スポーツ経営学研究, 16 : 29-42

内海和雄（1998）部活動改革. 不昧堂出版 : 191